『イロニーの概念』のキルケゴールはヘーゲル主義者か―ヘーゲルの歴史哲学とイロニーの不安―　　　　　　　　　　　　　　　　　静岡英和学院大学　大坪哲也

　本稿はキルケゴールの学位論文『イロニーの概念』とヘーゲル哲学との関係性を再考する論考である。『イロニーの概念』は、一見すればキルケゴールの初期思想の代表作として、ヘーゲル哲学の影響を多分に受けた著作だと見做される。しかし研究史を振り返れば、この初期思想自体がヘーゲル哲学に対してアイロニカルな態度をとっており、キルケゴールは言わばヘーゲリアンを偽装することによって、この論文のなかで間接的かつアイロニカルにヘーゲルを批判したという見解が支配的であった。これまでの研究史を強く規定してきたMesnardやThulstrupは、この初期の学位論文をキルケゴールの後の仮名著作活動に関連付けることによって、古代ギリシャのエイロネイア（εἰρωνεία）[偽装された無知]という主題が、キルケゴールに「仮名」著者の着想を与え、キルケゴールはソクラテスのイロニーから仮名著者になるための本質的な術を学んだと理解したのである。その意味で実名著作であるこの初期の学位論文は、すでに仮名著作の発想で書かれていると分析され、キルケゴールは初期思想において早くもヘーゲルに対する批判的な立場を確立していたと結論付けられた。こうしたThulstrup以来の歴史的客観的研究は、初期思想と仮名著作活動の連続的な一貫性を強く主張することで、初期思想からすでにヘーゲルとの積極的な影響関係を認めることをますます困難なものにしてきたのである。こうしたThulstrupらによって決定付けられてきた初期思想の解釈に根本的なメスを入れたのが、長くコペンハーゲン大学キルケゴールリサーチセンターの教授を務め、現ハーバード大学教授のJon Stewartである。Stewartによれば、キルケゴールのヘーゲルへの関係は、ヘーゲル批判や受容問題も含めて、デンマークヘーゲル主義との媒介関係を抜きに考えることはできない。彼の見解はキルケゴールの19世紀デンマーク語テキストが持つ、テキストの媒介性の重要さを改めて認識させ、これまで歴史研究のなかで排除されてきたヘーゲル哲学と、デンマークヘーゲル主義によって媒介されたヘーゲルとの影響史を再び我々の手に取り戻させたと言えよう。本稿は研究史上の解釈学的構成要件を根本的に見直すことで、キルケゴール初期思想における〈ヘーゲル主義〉を可能な限り明らかにする試みである。特に研究史において今もってほとんど明示的になっていない、デンマークヘーゲル主義者、アドルフ・アドラー(Adolph Peter Adler,1812 –1869)の初期思想との関係性において、『イロニーの概念』のヘーゲル主義を再考する。我々は、キルケゴールがヘーゲルの歴史哲学を積極的に継承したうえで、アドラー的な観点で世界精神における個人を考え、絶対精神が過ぎ去し後の「孤立した主体性」、「存在の単独性としての主体性」に接近したと理解するのである。本稿は、『イロニーの概念』のキルケゴールが、ヘーゲルの歴史哲学を肯定的に踏襲し、アドラーのヘーゲル主義に接近したと考察することによって、ヘーゲル哲学と単独者思想との積極的な影響関係を再考する試みである。